

## 石まぶ(和町町)

和田には、三床山があります。この山の中を歩くと、所々に岩石や、くぼみなどがあり、大きな深い穴が目につきます。これを人々は、石まぶと呼んでいます

石まぶのいわれは、昔、あるおじいさんが、大きな桧の切り株を見つけて、おもしろい飾り物になるなと思い掘り起こしたら、その穴のそばから石が出てきました。これも敷石になるのではと掘り起こすと、次から次へと大きな石が出てきました。このおじいさんの掘り起こした穴が、石まぶの元だと言われています。

こんな事があってから、「和田の山からいい石が出る」という「うわさ」が広がっていったようです。

石切りも、昔の村誌とか、人々の言い伝えによ

ると、約二七十年位前から掘り出されていたのではないかと推測されます。

石切り場で働いた最初の人は、商売職人

改帳 (一七二〇年記帳、昔からの働く人の名簿帳) に、職人二名が余田の人であったと書き残

されています。そのあとだんだんと豊地区の和田、

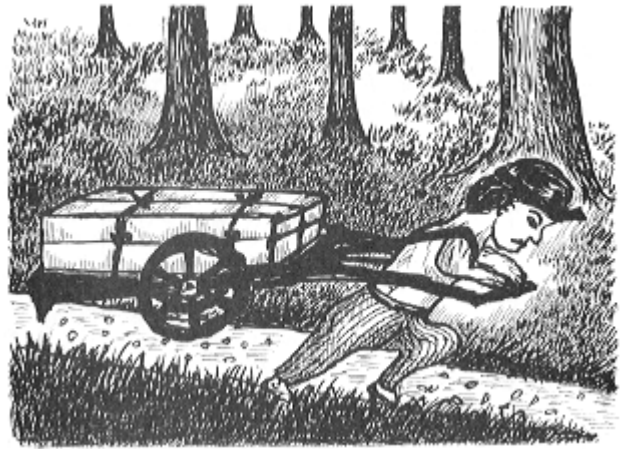
下野田、下氏家の人や、片屋、氷坂、西田中方面

の人々も働きにきました。

穴の数もふえて、大小いろいろですが、七か所

ほどあったと伝えられています。





石切り場で働いたおじさんたちは、土曜日も、日曜日もなく、朝早くから夕方おそくまで、一生懸命働きました。その上雨が降ると、前の日に掘った穴には土が流れ込んでいて、穴から石を出す

のが大変でした。

採石や石を運び出す方法は、はじめに掘り起こすとき、だいたいの大きさに「さしば」というもので切り線をつけて、鉄の矢（くさび）を入れ、「つるはし」で割り、横に切り開き、奥の方へと進んで、穴の中を広くして下へと切りおいて行きます。掘り出した石を荒切りして、穴の両側に並べておきます。後、丸田の棒を何本も並べ、その上に石を載せ「てこ」の応用で、ころがしたり、押ししたり、また、でこぼこの所はかついで道まで運び出しました。

道に出すと、山造りといって、だいたいの寸法に切った石を鉄の輪の荷車で、ガラガラと大きな音をたてて、何人ものおじさんたちで運びました。その後、馬車が使われるようになってからは、三倍の石を運べるようになりました。

石切りも、大正の末から昭和の始めころが一番多く掘り出され、「尺六」とか「五六」としての

製品に多く使用され、建築の基礎石や、土台石になりました。その他、玄関の敷石や、石垣・階段石・屋根の峰石・墓石・雨だれ用水槽・いろり石・こたつ石・白石・石灯笼・渡り石・護岩石・裝飾橋の細工物など幅広く利用されました。

和田石の搬出先は、鯖江、武生、何奈、今立と近辺が多く、県外では、大阪方面にも出され、昭和の初期ごろ、尺六一本の価格が、八十銭位だったようです。こうして石の生産も最盛期を迎え多く出されると同時に、穴も大きくなるので、明かりが必要となり、「カンテラ」や「ランプ」が使われ、同時に石を出すのも、「ウインチ」が使用されていきました。

第二次世界大戦が始まり、石きり場で働いていたおじさんたちも、戦争に行ったので、人手が足りなくなり、だんだんと仕事ができなくなりました。

戦争が激しくなった昭和十六年ごろ、軍がこの

穴の中を、軍需品工場にしようと、県内各地から人々を動員して、山の中の道を整備したり、穴の中をきれいにしていきましたが、終戦になり完成しませんでした。

現在残っている穴は、土がくずれ落ちて、狭くなっていますが、当時は大きいものでは、約千坪程の広さがあつたそうです。

終戦後、また、石を掘り始め、機械も使われ生産も伸びていきましたが、他の所の石が良質で、それに格安のため、和田石はだんだんと姿を消してしまいました。

